1996年(平成8年)12月16日(月曜日)
夕刊読賣新聞

牛の連凧に囲まれた梅谷さん。正月5日に〝揚げ初め〟を行う

正月の空泳ぐ天牛二世

函館の梅谷さん意欲の連凧

創作凧づくりで知られる函館市の元高校教諭梅谷利治さん(六七)(同市山の手三)が、来年の干支の牛をデザインした連凧を完成させた。

函館・五稜郭公園で一月五日、恒例となった〝揚げ初め〟を行う。

出来上がった凧は「北海天牛二世」と命名した。顔の部分は立体形で、胴体部分は直径五十㌢の円形凧四枚を糸で連ねて表現している。

四枚には、裏側の「力骨」の長さをそれぞれ微妙に変える工夫を凝らし、風に乗ると踊っているよう。合成紙の素材に、シルクスクリーンで着色している。

梅谷さんは、函館東高の元美術教諭。在職中から、立体凧や連凧などオリジナルの凧づくりを始め、毎年正月、その年の干支にちなんだ連凧を創作し、揚げ続けている。

干支にちなんだ連凧は二十二作目。「二巡目の干支の凧は、一回目と違うものを作ることにしている」が、今回のデザインは「あえて前作を踏襲した」。前作は、梅谷さんが大学の卒論テーマに選んだ巨匠・ピカソの大作「ゲルニカ」をヒントにしたからだ。

梅谷さんなりの社会風刺も込められており、「『ゲルニカ』は戦争の嘆きと悲しみを表現した作品。今の日本は表面上、戦争とは無縁だけど、汚職とかいじめの問題とか、『ゲルニカ』の嘆きとあきらめの表情がぴったりくるね」と話している。

正月待つ空のたこ

鮮やかにウシの絵柄

函館

【函館】二十年以上自作が来年の干支（えと）であるウシをモデルにしたたこを新春の空に揚げてこ作りに励んでいる。元高校教師、梅谷利治さん(67)＝函館市山の手＝は「北海天牛二世」。一枚が直径五十㌢の円盤状のたこを五枚を並べて一頭分（全長約百四十㌢）とし、すでに七頭分が完成。十頭

梅谷さん
ぞろい

来年のえと・ウシをモチーフに立体的なたこを作った梅谷さん＝早川健人写す

平成8年 12/28 日

出番待つ「ウシ」の連だこ

来年のえとの「ウシ」をデザインした連だこが出番を待っている。

シルクスクリーンで赤や青、紫など虹（にじ）の7色に着色した連だこは、顔と直径50㌢の胴体4枚でウシ1頭。10頭分をつなげると約30㍍になる。正月5日に函館市内の五稜郭公園の空に舞い上がる。

立体たこや連だこの製作で知られる同市山の手の元高校教師、梅谷利治さん(67)が作った。梅谷さんは30年前から、たこ作りに取り組み、えとのたこ作りも22年目。「来年はよい年になるように、暴れウシをイメージした」【早川　健人】